人間文化創成科学論叢　第23巻　2020年

ダブルディグリー・プログラムにおける中国人留学生の抱える困難
―留学動機の視点から―

張　　慧　穎*

Difficulties of Chinese International Students Who Join Double-Degree Programs:
Relations with Their Motivations for the Programs

ZHANG Huiying

Abstract

Double-degree programs（DDP）between universities of China and Japan are constructed more recently. This study aims to explore the difficulties of Chinese international students who join DDP and to investigate the motivations for the DDP. The questionnaire was completed by 134 DDP students.

A factor analysis was conducted. Five factors emerged for their difficulties: “dissatisfaction of their major subjects”, “difficulties in their future course”, “dissatisfaction of their friendship”, “dissatisfaction of monotonous life”, and “difficulties to communicate in Japanese.” In addition, five factors were found as their motivations: “challenging their potential”, “taking a passive selection”, “raising their academic background”, “escaping from their previous life”, and “understanding Japanese culture.” Furthermore, results of multiple regression analysis with difficulties as dependent variables and motivations as independent variables revealed that DDP students who apply DDP to take a passive selection and escape from their previous life experience more difficulties during their life abroad.

Results suggested that DDP students’ motivations were related to their difficulties in life abroad. It is therefore necessary to increase their determination to meet their goals.

Keywords：double degree, Chinese international students, motivations, self-determination theory, difficulties

1．研究の背景

国際化の進展に伴い、国境を越える移動、特に学生の移動が増加している。近年、日本では、留学生の受け入れが積極的に推進されている。外国人留学生在籍状況調査（日本学生支援機構, 2019）によると、2019年現在の外国人留学生数は312,214人であり、2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指すという「留学生30万人計画」が達成された。このように、多数の留学生を受け入れるようになっているという状況の中、留学によって異文化で生活する学生の状況を分析し、彼らが抱える困難とその関連要因を解明することは、留学生支援を検討するうえでも重要な意味があるといえよう。

一方、留学の形態も多様化している。近年は、国際的な大学連携に基づくダブルディグリー・プログラム（以下、DDP）が導入され、日本国内でDDPを実施する大学が増加している。ここでいうDDPとは、日本と外国の大学が「教育課程の実施や単位互換等について協議し、双方の大学がそれぞれ学位を授与するプログラム」（文

キーワード：ダブルディグリー、中国人留学生、動機、自己決定理論、困難

＊令和元年度生　人間発達科学専攻

部科学省, 2010）をさす。日本においてDDPを実施する大学数は、2006年の37大学から、2016年180大学、2017年189大学へと増加している。また、日本で実施するDDPの協定締結相手の件数が最も多い国・地域は中国で7,447件（文部科学省, 2019）となる。一方、中国においては、日本語学習者が100万人を超え、世界で最多となっており、その中の６割が大学生である（国際交流基金, 2018）。日本語を専門とする学科を設置する中国の大学は日本の大学とのDDPの構築に力を入れている。日中のDDPの構築により、来日する日本語を専門として学ぶ中国人留学生も増加すると推測される。

日本と中国の大学が実施するDDPに参加する学生は、中国の大学で日本語を専門として２年間勉強し、単位取得してから、日本の協定大学において新しい専門科目へ３年次編入する。そして、日本側の大学でさらに２年間勉強し、単位を取得することにより双方の大学の学位の取得を目指す。中国と日本の大学は学期の始まる時期が異なることにより、３年次の後期から日本の大学に編入するケースが多い。DDPを通して留学する学生は交換留学生とも呼ばれているが、短期留学生や６か月あるいは１年間留学の交換留学生と異なる点としては、日本語の勉強以外に、日本側の大学の専門科目の単位を取らないといけないことと、その専攻において学位を取らないといけないことが挙げられる。また、学部の従来型の留学生に比べると、DDP留学生は学部の４年間で学修する専門科目の知識を２年間で学ぶことが特徴である。そのため、学業面において負担を感じるのではないかと思われる。一方、DDPは大学間の協定による留学であり、大学が留学の手続きをするため、利便性があるといえよう。DDPに参加する学生が実際にどのような状況におかれているかについて明確にすることは質の高い学生支援に貢献し、プログラムの発展につながると考えられる。DDPは大学の国際化に貢献できる重要なプログラム（Knight, 2008）であり、グローバル人材の育成につながるプログラムとして、その実施状況や参加する留学生の実態を明確にする必要があると考えられる。DDPは「従来型の留学に比べて比較的低いコストで海外留学ができるため、経済的負担が軽減する」（洪, 2012）などの利点がある一方、様々な問題を抱えており、その影響を受けるのが学生であるという指摘（栗山・斎藤・前川・牟田, 2008）もある。これまでDDPについては、その利点が多く指摘されているものの、問題点については注目されておらず、十分な検討はなされていない（小澤, 2019）。

２．先行研究と研究目的

これまで、日本におけるDDPに参加する留学生に関する実証研究は管見の限り見当たらない。一方、日本における留学生の困難はさまざまな面から研究が行われてきた。その中で、言語の問題や経済面での問題、健康や学修上の問題などが困難として挙げられている（松原・石隈, 1993など）。また、人間関係・対人関係における困難も報告されている。横田・白土（2004）は留学生が抱える課題を「留学生問題」とし、その領域は「専門分野の教育・研究に関する領域」、「語学学習に関する領域」、「経済的自立と安定に関する領域」、「生活環境への適応に関する領域」、「青年期の発達課題に関する領域」、「交流に関する領域」であるとしている。中国人留学生を対象とした研究では、許・松田（2016）は中国人留学生のストレスについて、学業面におけるストレスである「論文の作成や研究」、「進学や入学試験」が一番多い（陳・高田谷, 2008）としている。対人関係においては、日本人との十分なコミュニケーションを取っていないこと（葛, 1999）、親密な接触が少ないこと（加賀美, 1994）が報告されている。一方、海外では、DDP留学生の感じる問題点について、Culver, Warfvinge, Grossmann, & Puri (2011) がスウェーデンにおけるDDPの教員と現役生、卒業生の学生に対するフォーカスグループ調査を行った結果、「大学間のコースの混乱」、「両言語での教師との交流」のような問題が指摘されている。この研究では学生の感じる問題点が挙げられているが、具体的な困難の内容の分析と考察は行われていない。

留学生の留学生活に対する影響要因としては、留学動機（岩男・萩原, 1988；譚・渡邊・今野, 2010；岡・深田・周, 1995など）が挙げられる。動機に関する研究では、自己決定理論（Ryan & Deci, 2000）がよく挙げられる。自己決定理論では、動機を内発的動機と外発的動機に分けている。内発的動機とは「自ら学ぶ・やる意欲」であり、「外から圧力をかけられることなく、自らの偽りのない気持ちにもとづいて学び、仕事をしようとする意欲」である。一方、外発的動機は「報酬やいい成績」などで他者に認められること、罰の回避など、「具体的な目的を達成するための手段としての行為に関した動機」である（原田, 2008, pp.153-154）。中国人留学生の留

学動機に関して、譚他（2010）は日本における中国人留学生307名を対象に動機の異文化適応に対する影響を自己決定理論によって分析した。その結果、中国人留学生の留学動機は自己決定の程度により、「内発的動機」、「統合的動機」、「取り入れ的動機」、「外的動機」であることが明らかにされた。さらに、内発的動機は学習・生活への適応状態と正の関連を示す一方、取り入れ的動機、外的動機は負の関連を示したとしている。譚他（2010）では留学動機を明らかにしたが、その分類は抽象的であり、中国人留学生の動機の具体的な内容が明らかになっていない。岡他（1995）によると、中国人留学生は交流や文化体験より勉学や言語習得を留学目的として重視していることを明らかにしている。岩男他（1988）は学位取得を目的（動機）として来日する留学生が多いと述べている。このように、留学生はそれぞれ異なる動機をもって来日していることが示唆される。しかし、これらの研究の知見が新しい留学形態であるDDPに参加する留学生の実態に当てはまるかについては検討の余地がある。

DDPは近年になって新しく導入された留学形態であり、DDPを構築するそれぞれの国の大学の学位を取得することという条件があり、それに参加する留学生と従来型の留学生とでは、抱える困難と留学動機が異なる可能性が考えられる。そのため、DDPに参加する留学生の実態を明らかにする必要があると考えられる。本研究はこれまで研究されてこなかったDDPに参加する留学生の困難を詳細に解明し、その背景要因として留学動機が困難にどのような影響を与えるかについて実証的に分析するものであり、よりよいDDPの検討のために、留学生にも、大学関係者にも基礎資料を提供することができる。

以上を踏まえ、本研究の目的は、「日本の大学のDDP協定締結相手として最も多い中国からの留学生（以下、DDP留学生）を対象に、彼らの抱える困難と留学動機を明らかにし、それらの関連を検討すること」とし、具体的な研究課題としては、DDP留学生の留学生活における困難はどのような構造になっているのか（研究課題１）、DDP留学生の留学動機はどのようなものか（研究課題２）、DDP留学生の留学動機は留学生活における困難にどのような影響を与えているか（研究課題３）とする。

３．研究方法及び調査概要

３．１　調査方法と対象者

2010年７月に、DDP留学生を対象に選択式質問紙調査を実施した。先述したように、DDP留学生は中国の大学で日本語を専門とする大学生で、DDPを通して日本へ留学し、日本の提携大学で新しい専門を履修し、３年次に編入する留学生である。そのため、本研究の対象者は、３年生と４年生になる。筆者の知人の協力を得て質問紙を配布し、調査対象者には、自由意思に基づいて回答してもらった。186部配布したうち、151部を回収した。回収率は81.2％であり、回答に著しく不備があったものを除いた結果、有効回答数は134部であり、有効回答率は72.0％であった。その内訳は、男性46名・女性88名、３年生56名・４年生78名であった。詳細は表１に示す通りである。

表１　調査協力者の属性（134名の集計）　　単位：人（％）

性別	男性：46（34.3％）　／　女性：88（65.7％）
学年	３年：56（41.8％）　／　４年：78（58.2％）
日本レベル	１級：53（39.6％）　／　２級：31（23.1％）　／　３級：２（1.5％）　／　無回答：48（35.8％）
アルバイト期間	０～６ヶ月：72（53.7％）　／　７～12ヶ月：32（23.9％）　／　13～26ヶ月：29（21.6％）　／　無回答：１（0.7％）

注）日本語レベル：旧日本語能力試験によるものである。

３．２　質問紙の構成と分析方法

質問紙の作成にあたり、予備調査としてDDP留学生12名を対象に１人につき１時間から１時間半程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューデータは文字化した後、各項目に関するデータを抽出し、KJ法（川喜田, 1967）の手法を援用し、カテゴリーにまとめ、分析した。

予備調査の結果を参考にして質問紙の項目を作成した。「留学生活における困難」34項目に対しては「あなたは今の日本における留学生活についてどう感じていますか」と示し、それぞれの項目に「とてもそう感じる」～「全くそう感じていない」の５件法で回答を求めた。「留学動機」26項目に対しては「あなたはなぜダブルディグリー・プログラムに参加することにしましたか」という質問文に続き項目を示し、「とても当てはまる」～「全く当てはまらない」の５件法で回答を求めた。また、性別、年齢、日本語能力、学年、奨学金の有無、希望する進路などに関する質問も含めた。質問紙は初めに日本語で作成し、次に中国人大学院生２名によりバックトランスレーションを行ったうえで中国語質問紙を作成した。

収集されたデータは統計的手法で分析を行った。「留学生活における困難」と「留学動機」については、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、その後、「留学生活における困難」、「留学動機」と属性の関連を検討するために重回帰分析を行った。

４．分析結果

４．１　DDP留学生の留学生活における困難に関する因子分析

DDP留学生の困難の構造を把握するため、因子分析を行った。ここでは、因子負荷が低い項目（.40以下）や複数の因子にまたがって高い項目を除外した結果16項目による５因子が抽出された（表２）。第Ⅰ因子は、日本の大学における専門科目に対する不満を表すもので「専門科目に対する不満」と名づけた。第Ⅱ因子は、進路の決定に対して困難が感じられるもので「進路決定に対する困難」と名づけた。第Ⅲ因子は、人間関係の構築や交流に対する不満を表すもので「交友に対する不満」と命名した。第Ⅳ因子は、留学生活に対して単調だと感じ、不満を表すもので「単調な生活に対する不満」と命名した。第Ⅴ因子は、日本語でのコミュニケーションが困難

表２　DDP留学生の留学生活における困難―因子分析の結果（バリマックス回転後の因子パターン）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
第Ⅰ因子　専門科目に対する不満（α＝.826）					
大学の専門科目の授業の内容は面白くない	**.693**	.182	.047	.133	.078
大学での専門科目に対して興味が持てない	**.674**	.111	.170	.099	.027
大学で好きな科目が少ない	**.629**	.157	.142	.195	.162
専門科目の基礎的知識がなくて、内容が理解できない	**.618**	.154	.160	.122	.137
専門科目の用語が理解できない	**.616**	.290	.075	.048	.177
第Ⅱ因子　進路決定に対する困難（α＝.774）					
就職活動や大学院受験などに対してどのように準備すればいいかわからない	.059	**.807**	.089	.121	.052
進路に関する情報がない	.266	**.778**	.119	-.034	-.101
就職活動や大学院受験などを準備する時間がない	.197	**.558**	.127	.131	.176
日々の生活が忙しくて、進路を考える余裕がない	.235	**.455**	-.008	.000	.139
第Ⅲ因子　交友に対する不満（α＝.706）					
周りに留学している中国人が多くて、新しい人間関係が築けない	.187	.090	**.685**	-.003	.041
地域社会で日本人と交流がない	.044	.239	**.631**	.175	.151
大学の中で日本人学生と交流がない	.159	-.031	**.603**	.189	.140
第Ⅳ因子　単調な生活に対する不満（α＝.795）					
今の生活はつまらない	.285	.143	.058	**.849**	.071
毎日の生活は単調だ	.135	.032	.314	**.695**	.115
第Ⅴ因子　日本語でのコミュニケーションに対する困難（α＝.652）					
周りの日本人の日本語が聞き取りにくい	.142	.115	.222	.157	**.770**
日本語で言いたいことを表せない	.284	.099	.114	.024	**.501**
因子寄与	2.59	2.06	1.52	1.41	1.05
累積寄与率（％）	16.20％	29.10％	38.60％	47.40％	53.90％

だと示すもので「日本語でのコミュニケーションに対する困難」と命名した。信頼性係数（α）は、第Ⅰ因子α＝.826、第Ⅱ因子α＝.774、第Ⅲ因子α＝.706、第Ⅳ因子α＝.795、第Ⅴ因子α＝.652と、おおむね許容できる信頼性係数が得られた。

4．2　DDP留学生の留学動機に関する因子分析

DDP留学生の留学動機についても因子分析を行った結果、17項目による５因子が抽出された（表３）。第Ⅰ因子は、留学して自分を成長させ、可能性を求めるもので「可能性の探求」と名づけた。第Ⅱ因子は、特に自発的な意思で来日しているのではなく、プログラムに従っただけで来日しているもので「消極的な選択」と命名した。第Ⅲ因子は、日本の大学院に進学して勉強したかったからなどの２項目から構成され、「学歴の向上」と名づけた。第Ⅳ因子は、留学前の生活から逃げ出したいというもので「現実からの逃避」と命名した。第Ⅴ因子は、日本文化に対して深く知りたいという動機で「日本文化理解」と命名した。信頼性係数（α）は、第Ⅰ因子α＝.856、第Ⅱ因子α＝.704、第Ⅲ因子＝.748、第Ⅳ因子＝.707、第Ⅴ因子＝.699であり、一定の内的整合性が認められた。

表３　DDP留学生の留学動機―因子分析の結果（バリマックス回転後の因子パターン）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
第Ⅰ因子　可能性の探求（α＝.856）					
自分の生活能力を高めたかったから	**.803**	-.001	.023	.112	.059
日本で生活してみたかったから	**.738**	-.017	.130	-.002	.248
自分を鍛えたかったから	**.693**	-.204	-.025	.004	.108
視野を広げたかったから	**.656**	-.082	.078	-.108	.043
海外で勉強したかったから	**.641**	.119	.295	-.025	.284
留学経験がしたかったから	**.579**	.177	.217	-.149	.181
第Ⅱ因子　消極的な選択（α＝.704）					
学校のシステムがあるからそれに従った	-.033	**.736**	.086	.075	-.109
友達が来るから、一緒に来た	-.102	**.543**	.053	.202	.125
学校が薦めたから	-.005	**.541**	-.026	.231	.337
こういうチャンスがあるから、あまり考えず来た	.191	**.491**	-.181	.079	-.068
受かりやすかったから	-.176	**.477**	.272	.218	.045
第Ⅲ因子　学歴の向上（α＝.748）					
日本の大学院に進学して勉強したかったから	.124	-.019	**.831**	.077	.209
日本の大学院の学位がほしかったから	.270	.066	**.682**	-.032	-.044
第Ⅳ因子　現実からの逃避（α＝.707）					
家より遠い所に行きたかったから	-.072	.287	.024	**.898**	.120
前の生活から逃げ出したかったから	-.006	.230	.012	**.520**	.029
第Ⅴ因子　日本文化理解（α＝.699）					
日本文化を知りたかったから	.376	.052	.091	-.048	**.771**
日本人の考え方などを理解したかったから	.251	.012	.090	.205	**.523**
因子寄与	3.23	1.84	1.45	1.33	1.27
累積寄与率	19.00％	29.80％	38.30％	46.10％	53.60％

4．3　DDP留学生の留学生活における困難と留学動機、属性との関連

DDP留学生の「留学生活における困難」は「留学動機」、属性とどのような関連があるかを検討するために、「困難」を従属変数とし、「留学動機」の５因子と学年、日本語能力、アルバイト期間の３つの属性[1]を独立変数とし、重回帰分析（強制投入法）を行った。分析の結果、有意な要因は「消極的な選択」、「学歴の向上」、「現実からの逃避」と属性の「学年」であった（表４）。まず、「専門科目に対する不満」には、動機の「消極的な選択」（β＝.184 p＜.05）が正の影響、「学歴の向上」（β＝-.231 p＜.01）が負の影響を及ぼしていた（R^2＝.158）。次に、「進路決

表４　困難を従属変数、動機・属性を独立変数とした重回帰分析結果

		困難				
		専門科目に対する不満	進路決定に対する困難	交友に対する困難	単調な生活に対する不満	日本語でのコミュニケーションに対する困難
動機	可能性の探求	.059	-.030	.036	.013	-.134
	消極的な選択	**.184** *	.099	-.039	.056	.032
	学歴の向上	**-.231** **	-.025	-.004	-.099	-.072
	現実からの逃避	.142	.178 *	.112	.155	**.196** *
	日本文化理解	-.060	.057	-.004	-.003	.029
属性	学年	-.012	**-.762** **	.124	.390	**-.441** *
	日本語レベル	.063	.015	-.176	-.034	.039
	アルバイト期間	-.025	.021	-.006	-.003	-.003
R^2		**.158** **	**.125** *	.048	.095	**.133** *

注）数値は標準偏回帰係数　　$^{*}p<.05$　　$^{**}p<.01$

定に対する困難」には、動機の「現実からの逃避」（$\beta=.178$ $p<.05$）が正の影響、属性の学年（$\beta=-.762$ $p<.01$）が負の影響を及ぼしていた（$R^2=.125$）。最後に、「日本語でのコミュニケーションに対する困難」には、動機の「現実からの逃避」（$\beta=.196$ $p<.05$）が正の影響、属性の学年（$\beta=-.441$ $p<.05$）が負の影響を及ぼしていた（$R^2=.133$）。

５．考察

まず、研究課題１について、本研究はこれまで明確にされてこなかったDDP留学生の抱える困難を解明した。本研究の結果から、DDP留学生の抱える困難の内容について、まず研究・学修について「専門科目に対する不満」が感じられるのは、DDPの実施形態に関わると推測できる。先述したように、DDP留学生はDDPを通して日本の大学へ編入するとき、新しい専門を履修することになる。専門知識がないため、３年次の授業を履修することに困難を感じると推測される。次に、「進路決定に対する困難」に関しては、対象者は大学３、４年生であり、学業以外に進路の選択にも直面している状況にあると考えられる。日本に留学してすぐ進路問題に直面するのがDDP留学生特有の困難だといえる。具体的な項目の中では、進路に対する情報の少なさと準備の手続きの不明瞭さ、時間的に余裕のなさという困難な状況がうかがえる。また、交友面、生活面、言語面ではこれまで指摘されてきた留学生の問題（藤井, 2014；葛, 1999；松原他, 1993など）と共通していると考えられる。ここでは、言語面においてDDP留学生は日本語でのコミュニケーションに対して困難を感じることが示された。DDP留学生は日本語を専門とする学生であるにもかかわらず、日本語交流に関して支障を感じているようである。本研究ではDDP留学生が日本語が聞き取りにくい、言いたいことを表せないという困難を抱えていることが示された。これは中国の大学で日本語を学んではきたが、日本語でのコミュニケーション能力が弱いためであると考えられる。

また、研究課題２については、DDP留学生の留学動機の具体的な内容が明らかになった。ここでは、DDPの魅力とされるダブルディグリーのための留学動機が見られていない。これはDDP留学生がDDPの協定大学の学位取得を目的としていないためであると考えられる。本研究で得られたDDP留学生の留学動機は、自己決定理論から見ると、「可能性の探求」、「日本文化理解」、「学歴の向上」、「消極的な選択」、「現実からの逃避」と、自己決定の高い順に並べることができると考えられる。「可能性の探求」は、自分の可能性を異文化の生活を通して試してみたいという意識である。「日本文化理解」は日本の文化や日本人の考え方を知りたいという意欲である。これは、日本語を専門とした大学生が日本語を学んだうえで、さらに日本文化にも興味の対象を広げているものと思われる。そのため、日本語を専門とするDDP留学生にとって、DDPを通して日本へ留学することは日本文化を理解するチャンスだと感じられているのではないかと推察される。これは岡他（1995）の示した、留学生が文化体験より勉学や言語習得の動機を持っているという結果と違い、DDP留学生は日本文化理解を重視してい

ることがわかった。また、「学歴の向上」については、日本の大学院に進学し、その学位が欲しかったなどの項目からなっている。先述したように、DDPの魅力とされるのは、中国と日本両方の大学の学位を取得できることである。しかし、DDP留学生はDDPによる二つの学位の獲得より、日本の大学院への進学が目的であることがうかがえる。DDP留学生は短期や交換留学生と違って、大学卒業後、直接日本で大学院へ進学できるというメリットがあるため、「学歴の向上」動機で留学していることが考えられる。一方、「消極的な選択」、「現実からの逃避」動機も見られた。これらは自己決定の低い外的動機だといえる。DDPは大学間の協定に基づくため、留学手続きがより簡易なシステムである。それは学生にとって、メリットではあるが、この利便さだけに注目し留学を選択したものと考えられる。

さらに、研究課題３について、DDP留学生の留学生活における困難に属性要因および留学動機がどのように影響するか、重回帰分析の結果から論じていきたい。

第一に、「専門科目に対する不満」には「消極的な選択」が正の影響、「学歴の向上」が負の影響を及ぼしていた。これは、消極的にDDPを選択して留学し、日本で大学院への進学を考えていない場合、専門科目に対して不満を持つ傾向のあることを意味する。つまり、留学を通して何かを学び・達成するという考えより、DDPという便利なシステムがあるから留学を決めたという自己決定性の低い動機をもって留学したため、留学後、大学の専門科目の内容が面白くなく感じたり、興味を持てなかったりといった現実的な学業の問題に直面するのではないかと考えられる。また、「学歴の向上」動機は日本の大学院への進学を望むという動機であり、この場合、大学院受験の準備のため、専門分野の知識の獲得に取り組んでいることが推測される。その反面、この動機を持てない場合、専門分野での学習に対する意欲が低く、困難を感じると考えられる。

第二に、「進路決定に対する困難」には「現実からの逃避」が正の影響、学年が負の影響を及ぼしていた。これは、DDP留学生が元の生活から逃げ出すため留学し、学年が低い場合、進路に関して困難を感じる傾向にあることが示された。先述したように、「現実からの逃避」も自己決定性の低い動機だといえる。日本の大学生を対象とした動機に関する研究では、非主体的かつ無気力な理由で進学することは学生生活に影響を及ぼす（斎藤, 2002）ことが指摘されている。DDP留学生の場合、留学目的を明確にせず、生活環境を変化させるという漠然とした動機で留学した場合、進路問題に直面した時、さまざまな困難を感じていると考えられる。ここでは学年が低いほうが、つまり４年生より３年生のほうが困難を感じる傾向があることがわかった。これは、３年生の場合、留学生活が始まったばかりで、進路に関する情報収集がまだできていない状況にあり、より強く困難を感じているのではないかと考えられる。

第三に、「日本語でのコミュニケーションに対する困難」には、留学動機の「現実からの逃避」が正の影響、学年が負の影響を及ぼしていた。これは、DDP留学生が以前の生活から逃げ出すため留学し、学年の低い場合、日本語でのコミュニケーションには支障を感じることを意味する。まず、以前の生活から逃げ出すということは元の中国での大学生活に不満を感じていたと推測され、専門である日本語の勉強に対する積極的な意欲が低い可能性がある。そのため、留学後、日常生活で使う日本語での交流において困難を感じるものと思われる。また、４年生に比べると、３年生のほうが来日してからの期間が短いため、さらに日本語での交流に困難を感じるのではないかと考えられる。

６．まとめと今後の課題

本研究はDDP留学生の留学生活における困難と留学動機を明らかにし、さらに留学動機と属性が困難に与える影響を検討した。その結果、DDP留学生の留学生活における困難としては、「専門科目に対する不満」、「進路決定に対する困難」、「交友に対する不満」、「単調な生活に対する不満」、「日本語でのコミュニケーションに対する困難」の５因子が見いだされた。留学動機としては、「可能性の探求」、「学歴の向上」、「日本文化理解」、「消極的な選択」、「現実からの逃避」の５因子が得られた。また、留学動機と学年が留学生活で抱える困難に影響を与えることが明確になった。

本研究の結果から、DDP留学生は学業面においては、日本語と専門科目に関してさまざまな困難を感じていることが分かった。中国の大学では日本語を専門科目として勉強していたDDP留学生は日本語でのコミュニケー

ション能力が弱いことが示された。また、留学に伴い、専門科目の変更により生じる授業についていけないという問題、２年間という短期間で専門知識を勉強し、大学院へ受験するときに感じる専門知識の欠如の問題が示された。DDP留学生が中国の大学から日本の大学に編入するにあたって、専門科目においてはいかにスムーズに適応するかが課題だと考えられる。さらに、学業面における負担を抱えていながら、進路の選択に直面し、準備するための時間的・精神的な余裕がないことが明らかになった。

また、DDP留学生は消極的な外的動機で留学することがあると示された。DDPは中国人大学生が利用しやすいシステムで留学できるチャンスを提供しているといえるが、その利便性だけをもとに留学してしまう可能性もあるといえる。本研究の結果から、消極的な外的動機で留学する場合、さまざまな困難が感じられることが見られた。留学動機が留学生活を左右する重要な要素だということが示唆され、DDP留学生が留学前の具体的な留学目的の明確化やDDPを構築する大学側がDDP留学生の選定基準の検討やDDP留学生の自己決定感を高めるためのさまざまな取り組みが必要だといえる。

本研究では量的調査によってDDP留学生の抱える困難の実態と関連要因の一つである留学動機を把握することができた。さらに、DDPという新たな留学形態の参加者の抱える困難と留学動機の関係を明らかにした。しかし、感じる困難は時間の経過によって変化するものであり、本研究は困難の変化を把握する観点からは論じられていない。また、本研究は2010年の質問紙調査のデータを再分析したものである。今後は最新の状況を把握するため、再調査を行う必要があろう。また、DDP留学生の学部や専攻による差異も検討する必要があろう。これらについては、今後の課題としたい。

【注】

1．属性に関しては、先行研究を参考に、異文化適応に影響を与える人口学的変数要因として日本語能力のレベル、アルバイト（岡他, 1996）、および学年を投入した。

【参考文献一覧】

Culver, S. M., Warfvinge, P., Grossmann, C., & Puri, I. K. (2011). Evaluation of engineering double-degree programs in Sweden: results of the Lund Focus Groups. *European Journal of Higher Education*, 1(2-3), 220-232.

藤井桂子（2014）「留学生は何に困難を感じているか―2003年と2012年のアンケート調査結果から―」『ときわの杜論叢』1, 145-171.

原田登美（2008）「留学経験は学習動機にいかに関わっているか―『自己決定理論』に拠る『甲南大学Year in Japanプログラム留学生』の留学と日本語学習の動機の変化―」『言語と文化』12, 151-171.

岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生―社会心理学的分析―』勁草書房.

加賀美常美代（1994）「異文化接触における不満の決定因：中国人就学生の場合」『異文化間教育』8, 117-126.

葛文綺（1999）「留学生の異文化適応に関する研究―来日目的、対人イメージと適応度との関連を中心に―」『名古屋大学教育学部紀要』46,287-297.

川喜田二郎（1967）『発想法―創造性開発のために』中央公論社.

Knight, J. (2008). *Joint and Double Degree Programmes: Vexing Questions and Issues*. Toronto: The Observatory on Borderless Higher Education, Ontario Institute for Studies in Education, University of Toronto.

国際交流基金（2018）「2018年度海外日本語教育機関調査」
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html　〈2020年７月８日アクセス〉

洪伊瑩（2012）「マレーシアにおける国際共同学位プログラムの効用と課題―日本マレーシア高等教育基金借款事業を事例として―」『アジア太平洋研究科論集』24, 321-340.

栗山直子・齊藤貴浩・前川眞一・牟田博光（2008）「わが国の大学院における共同学位プログラムの現状に関する研究」『大学評価・学位研究』8, 3-20.

黒田憲洋（2003）「動機づけ研究における文脈」『心理学評論』46(1), 5-11.

許倩・松田英子（2016）「在日中国人留学生の異文化適応支援の現状と問題―異文化ストレス、留学生のパーソナリティからの分析―」『東洋大学大学院紀要』53, 63-76.

松原達哉・石隈利紀（1993）「外国人留学生相談の実態」『カウンセリング研究』26, 146-155.

文部科学省（2010）『我が国の大学と外国の大学間におけるダブル・ディグリー等、組織的・継続的な教育連携関係の構築に関するガイド

ライン』 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1294338.htm 〈2019年３月８日アクセス〉
文部科学省（2019）『大学における教育内容・方法の改善等について』
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00005.htm. 〈2020年８月８日アクセス〉
日本学生支援機構（2019）『2019（令和元）年度外国人留学生在籍状況調査結果』
https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/date/2019.html. 〈2020年11月14日アクセス〉
岡益巳・深田博己・周玉慧（1995）「中国人私費留学生のソーシャル・サポート」『岡山大学経済学会雑誌』27(3), 493-523.
小澤みどり（2019）「インドネシアと日本の大学間国際共同学位プログラムの大学国際化へのインパクト」『アジア太平洋研究科論集』37, 57-75.
Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2000). Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
斎藤浩一（2002）「大学志望動機が入学後のストレッサーおよび大学嫌いに及ぼす影響」『進路指導研究』21(1), 7-14.
譚紅梅・渡邊勉・今野裕之（2010）「動機づけの自己決定性が在日中国人留学生の主観的幸福感および学習・生活への適応に及ぼす影響」『目白大学心理学研究』6, 43-54.
陳金・高田谷久美子（2008）「在日中国人留学生の勉学・生活におけるソーシャル・サポートの特徴とその効果」『山梨大学看護学会誌』6(2), 17-24.
横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング―学習・生活・心理をいかに支援するか―』ナカニシヤ出版.